

夕張市美術館を巡る
想いと語り

上木元館長と振り返る

過去からの贈り物を受けとり、語り継ぐ

発行日：2023年8月5日

発行：夕張市教育委員会〈学芸員・山口〉

挨拶

二〇二二年八月に実施した旧夕張市美術館収蔵作品展二〇二二において、企画担当者による、お話を開催しました。本冊子はその内容をまとめたものです。多くの方の支援や助言により、人口減少が甚だしい状況の中でも、前を向き、歴史や文化の継承活動が実践できています。皆様に心から感謝申し上げます。

ささやかですが、今後の推進力になることを願って、本冊子を皆様に贈ります。



目次

夕張市美術館のあらまし	3
最初の企画展	6
木下勘二さんの作品展示	7
小林政雄さんの作品と炭鉱絵画	9
夕張の作品を鑑賞すること	12
作品の質・展示の質・美術とは	13
一番重要なのは後から感じたりする	18
今後の展示の方向性	20

お話会

八月十七日(木) 午後六時

右・上木 和正

(元夕張市美術館館長)

左・山口 一樹

(市教委 学芸員)



【夕張市美術館のあらまし】

山口… 夕張市美術館の成り立ちについて、上木さんの方からざっくりお話をお願いしてもよろしいですか？

上木… えーっと、あれはね警察署の前だから旭町なんですよ。今の閉鎖になった図書館の二階に一九七九年に、二月かな、オープンしたんです。それは市町村でいうと、北海道で網走美術館に次いで二番目ですね。三番目はその年に小樽市立美術館ができました。市立の美術館としては道内では二番目で早い方です。

一九七九年というと、夕張市の人口は五万人はいたか、一九七七年に黄色いハンカチの映画が作られた頃で、市役所ができた年。中田さんが市長になった年。まだ炭鉱があるから、炭鉱関連の仕事がいっぱいあって、人の動きも本町方面には多かった。私二九歳の時には、若菜にある久保田タイプ印刷所に勤めて、デザインとか印刷関連作ってたんですね。それから新鉱事故が一九八一年にありまして、炭鉱はだんだん閉鎖。人口も流失と。石炭の歴史村がオープンしたんですけども、オープン五、六年は混んでましたね。一九八八年に美術館、ボーリング場で新規オープンしたんです。もう三四年前になりますね。八八年というときまだ中田市政で観光創生で、パンダサーカスとか、歴史村でやっていました。それで観光はまだ成り立っていて、その頃に美術館が新規オープンしたと。その時に、私ともう一人の源藤というのが入って、破

綻まで続いたわけですね。

それで夕張市美術協会というのが、歴史がある、もう六〇年を超えている。今は小林和拓さんが会長をやってるんですけども、私さんが来た頃は美術協会の会員が四、五〇名だったんですね。人口も多いですから。道展会員の畠山哲雄さん、小林政雄さん、全道展の土屋千鶴子さん、新道展の比志恵司さん、ここにも展示していますけども、その人達が牽引者となって、美術協会を引っ張っていったと。その歴史の中で、まあ炭鉱に係わる仕事をしていた教員であった、郵便局に勤めていたなど様々な職に就いていた方が美術協会に参加して、一年に数回展覧会をやった。そして、夕張を離れる際に作品を置いて行ったというのが夕張市美術館のコレクションの原点です。その時はまだ美術館ができてませんので、市民会館・公民館に数十点寄贈という、始まりですね。その時まで常設展などはできませんでした。七九年に図書館の上にてきてから三、四〇点を常設展ということで、公開し運営をしていました。そして八八年から、十何年して、二〇〇六、七年ですね、破綻になって、公共施設をほとんどなくそうと、という国の政策ですね。それは反対も何も言えないので、図書館も潰すことに。当初は図書館の二階に美術館をもつてって、図書館一館だけで運営をしようという話も持ち上がったんですが、結局一館だけでも経営維持をするには年間数百万かかるということで、図書館は図書コーナーとなって、若菜に移り、その後、二〇二〇年にりすたオープンと同時にりすた図書館としてこ

ちらへ移ってきました。

なんやかんやありましてですね、加森観光が夕張りゾートという名前で美術館を引き継いだんですが、冬期間は半年閉鎖ということで、十一月から翌年四月いっぱいまで休館ということになってました。不幸にも二〇一二年、その年は、雪が多いのに寒いと、融けないんで、美術館の屋根に積もったまま一月、二月と経過して、二月の映画祭のオープンする前の日の晩にですね、二月二二日、時間は夜の十時、おそらく五十分ほどだと、ミツノの社長は言っていましたね。二〇一二年の二月二二日二時何分ということで潰れてしまったんです。作品は一階の展示室に置かないで、地下の収蔵庫に全部置いてましたんで、作品はほとんど百分百助かりました。一点だけ大き過ぎる一五〇号の作品がホールにあったのが、ちよつと傷ついただけですね、幸いにも。それで急遽、美術館が潰れてしまうということで、市内の公共施設に一週間かけて運んだんですね。それが今日まで至っています。

その美術館の所蔵作品に対してもそうですけども、なぜ美術館ができる、そして作品が集まってきたかというと、やっぱり炭鉱の、夕張の炭鉱というのは有数の出炭量を誇ると言われるくらい人口があつて、ということは暮らしの中で、文化に携わる人、色んなジャンルですね、音楽、美術、書道、あと文芸、短歌、俳句、演劇といろんな分野で人がいたということ。市民会館の公民館講座はですね、日にちと場所がとれなくて、飽和の時代も、昭和三十年代四十年代にあつたみたいです。それくらい活性化した。だから雪月花展というのは、その活性化が今日に至つ

ている証拠ですね。三分野、川柳、短歌、俳句・書・お花、この三つの分野で五〇回以上続いているというのはやっぱり稀有な現状の夕張であると思います。まあなんやかんやあって、そういう歴史があつて今日に至つているというわけですね。

【最初の企画展】

山口.. 美術館での企画展では何か記憶に残る、特に記憶に残るものはありますか？

上木.. 所蔵品で夕張の関連の作品展、常設展、展示替えをするにも作品数が少なくてですね、最初は二〇〇点もなかったんですよ。美術館で百点並べて展示替えするにも、展示できないような作品も所蔵してましたので、なかなか所蔵品で企画展できなくて。

それで一番最初にやったのはですね、一九八八年の新装オープンの年に『夕張を描く・移りゆく風景展』っていう、絵で描いた風景を今の段階で写真を撮って並べたと。畠山さんが昭和三〇年代に描いた絵は、昭和六〇年代、平成になる前ですね、ちょうど元年くらい。建物は残っていない。それを現存しない風景を描いた油絵と写真を並べたというのが、それがね、一番最初の『移りゆく風景展』で五〇点ほど並べたのかな。

山口.. 私もスロウという雑誌を後ろに置いてあるんですけど、上木さんが特に印象に残る展覧会とすることで、実はお気づきの方もいらっしゃるかもしれませんが、三章のタイトルを

「移りゆくまちの風景」という名前にしたのは、その一回目の展覧会とちよつと被せた、というのもありました。

【木下勘二さんの作品展示】

山口… これまで上木さんも多分0から1を作るような展示企画をされてきたと思うんですけど、特に面白かったこと、やりがいとかつてどういったところにありましたか？

上木… 例えば日本全国の美術館は巡回する展覧会があるんですよ。三〇〇万でこの展覧会を九州から始めて関西、東京を通つてきて北海道やらないかとなると、近代美術館とかが三〇〇万・五〇〇万払つて同じ展覧会をやるというのが多いんですよ。だから独自で企画する。例えば北海道ならではの展覧会というのはなかなか立ち上げにくいとか。時間もかかるし。夕張市美術館の場合はそういう売つてる展覧会は三、四〇〇万かかるとなると、それは無理だと。そうじゃない夕張ならではの展覧会をどうしたらできるかということで、夕張出身者に目をつけるとするか、ゆかりの人に目を付けてやってみようと。その時に木下勘二さんという夕張南校の美術教師だった人が、五〇歳の時に釧路に転勤したんですけれども、釧路で高校の教師をして、体を悪くして七〇いくつで亡くなったんですね。それが一九八八年美術館が新装オープンした翌々年で、木下さんの作品が釧路に残されていて、そのほとんどが夕張市美術館でどうす

1988年 夕張市美術館新装開館
1989年 『夕張を描く・移りゆく夕張風景展』
1990年 『木下勘二追悼展』

かと。収蔵庫にも余裕がありましたから、わかりました全部預かります、ということ運んできたんです。そして『木下勘二追悼展』をして、全館で八〇点ぐらいでしょうか。それが本格的な展覧会でした。

山口.. 木下先生を知らない方は、有名なもので夕張メロンのロゴマークもあるんですけど。それも

上木さんが高校生時代に、美術部で描かれていたものを見ていらしたんですね。すよね。

上木.. そうですね。夕張のメロン箱ですね。茶色と白箱ありますけども、木下勘二さんは沼ノ沢出身で、お兄さんが農業指導員かな。名前は木下勘一さんっていうんですけども、弟さんの勘二さんもやっぱり農家の生まれということで、初期は蹄鉄師や炭鉱風景とか、炭鉱に関わりのある絵を描いていました。当時は戦中戦後、二十歳くらいの時に、特に教育の大学もいってなかったですからね、臨時の資格のようなものがあって、代用教員のような感じで勤めていた。夏冬休みに本格的に東京の美術部学校、大学に行って資格をとったという、苦勞人ですね。一五・一六歳でも道展に出品しているの、早熟な絵描きだったと思います。

山口.. はい、ありがとうございます。道展についても詳しくない方がいると思うんですけども、昭和三〇年くらいまでは個展をやるっていうことはほとんどなくて、そもそもそういうことができる場所がなくて、やっぱり公募展に出すのが当時の美術の主流だったようです。

上木.. そうですね。アマチュアに限らず、絵描きさんの年に一回ある道展・全道展に大作を出品することが、まあ自分の発表の場だった。それ以外は丸井今井デパートの上にしか大きな会場が

なかった。あとは豊平館かな。豊平館くらいだったでしょうね。

【小林政雄さんの作品と炭鉱絵画】

山口… 特に上木さんが想い出す夕張の文化を支えてきた人で、今紹介した木下勘二さんとかお話が
出ましたが、他に特に印象に残っている方はいらつしやいますか。

上木… ここに絵巻が二本ありましてね、五m四十cm。これを作ったのは小林政雄さんという北炭
の測量士をした方です。地質とアイヌ語の地名に大変詳しい方で『夕張風物抄』という広報ゆ
うばりに連載したものが本にもなっています。小林政雄さんは画家でもあるが研究者でもあつ
たということで、沢山の書籍や、ズリ山の激しい絵も残しています。札幌で土地家屋調査士と
して独立したときには、夕張のような荒々しい山がないので、創生川のポプラ並木だとか、す
すきのの、けばけばしい看板を描いて気を紛らわしたと聞きましたが、「やっぱり俺の絵はズ
リ山だな」という風にずっと言っていましたね。絵は綺麗であつちやいけない、と。「あれは
汚れているんじゃないかってそれでも生きているんだ」という生き方で九〇何歳まで生きていた。
小林さんは絵の強さもさることながら、人間的魅力もそうですね、道展の古参会員として中々
人気があつた人です。

それと同時に、世代は違うんですが、畠山哲雄さんですね。夕張市美術館は畠山さんの作品



▶展示会場の様子

小林さんの『夕張風物抄』と『捨石の山』を展示しました。『捨石の山』を鑑賞する会も催され、その作品の魅力を味わいました。

小林さん自身は炭坑内で採炭をされていたわけではありませんが、測量士として実際に入ってその労働を目の当たりにしていた人でした。その経験を元に描かれた作品は、荒々しい筆致で、力強さを感じます。また、平面にズリ山を構成し、他にはないリズムカルな絵画が生まれました。

なお、「捨石」というのは、札幌で作品を展示した際に「ズリ山」が伝わらないことからつくった小林さんの造語です。

は畠山さんの作品が一番多いですね。数えればスケッチなども入れて数百点。今回の展示でも一番多く、三〇点ほどありますね。だから三〇年ほどの歴史の中で、小林政雄さんの作品、畠山さんの作品、木下さんの作品で企画展ができたという。炭鉱絵画と括られていますけどね、いずれも道展会員で道内で名の知れた画家ということは幸運なことだと思います。夕張にとつてはね。

山口.. ここで、小林さんの書いた文章があるので少し読ませていただきたいと思います。

おっとりした自然よりも人間が作った風景、炭鉱のズリ山、
山腹を切り開いて作った炭住風景、工場、発電所の建物など、
力強い風景に魅せられます。

まさに書いてある通りではあるんですけども、今上木さんが仰ってくださいったことが感じられるかと思います。

上木.. だからあの、生きている地底の石炭を掘る、燃える石炭を生きた人間が掘る。選り分けた燃えない石をズリというんですけどね、積み上げてズリ山になる。小林さんは、ズリ山は最後生きていて、という発想の人だったので、ズリ山を沢山描いてますね。見事にズリ山が占領して、ズリ山が燃えて怒っているような感じもするし、遊んでいるような感じもするし。

山口.. ズリ山が最後まで生きているというのが、今のズリ山を見るとそういう風には見えないような気がするんですけども、当時はそういう風な感じがしたのだと感じました。

【夕張の作品を鑑賞すること】

山口.. 今回展覧会に来た方で、「やつぱり仲間意識があったんじゃないか、というような雰囲気の間調性を感じる」という人がいらっしやったんですけども、そういう夕張から生まれた文化の特徴とか、それがどんな風に変わっていったのか、何か思われることはありますか。

上木.. 労働が炭鉱から離せないということで、「土」です。それも足の土踏まずの下の方を掘って生活する糧を、企業存続する、という。だから地中、地下の中が仕事ですから、一般的な仕事ではないんですよ。それは特殊な仕事なんだけれども、戦中戦後昭和三〇年ごろまでは炭鉱といえばそれが当たり前の仕事だったから、土を離れては生きていけないというね、だから例えば気温が四〇度、湿度一〇〇%、そして明かりがないから、どうやって見るんだっていったら、カンテラをつけて、弁当は砂まじりとか関係なく食べてしまうという。だから地上で我々が優雅に朝食だなんてそういう世界じゃないですよ。風土が通底するというか、石炭を焚いた煙がですね、降った雪を真っ黒にしてしまうという風土で何十年育つてますから、我々の世代はそうですね。小学校の暖房は全部石炭だったから。それはやつぱり昭和の。今五〇代以降、うちの娘も石炭運びやってみたんですけどね、清水沢中学校で。

【作品の質・展示の質・美術とは】

山口… 昨年の九月から私の強い願いもあって、上木さんに協力してもらって作品のデータ化を進めているところなんですけども。その中で、上木さんに逐次説明をいただいて、作品一点一点について僕なりに見て、感じて、考えながら今回作品を選ばせていただきました。もちろん直前で変わったものもあるんですけども。展覧会を構成するにあたって、空間をこういう風に使うといったことも相談しながら、今皆さんが見ているとおりの形で構成させていただきましたが、上木さんはどんな風に今回の展覧会を思いますか。

上木… 旧美術館があったときはやっぱりいろんな人が来るため、ある程度の質的なクオリティっていうんですか、地方の美術館だから、アマチュアの画家の絵だからということではなくて、これはどこに出しても誰が見ても恥ずかしい作品で展示の仕方をと心がけてきた。しかし、ちよつと意識がそつちに傾きすぎるとレベル以下の作品であるのか、どんな絵なのか、何がレベル以下なのか、中々困る。それは未完成だとか、絵の具の塗り方が白っぽすぎるとか、っていう風な判定で陽の目をみない作品が結構あったんですね。それを今回山口さんと一点一点見て。非常にその選び方が、不遜な、上から目線で、描いた本人の作家の気持ち、心を見えないんですね。外向きの気持ちで見ているから一点向き合って、その絵から受けるものに自分が真っ白になっていないんですね、何か知識だとか偏見で向っているというのがわかりましてね、あ、ダメだなこれと思った。

評価されている絵もやっぱり違う偏見で見えてしまっているということで、評価も、違う仕方の、本人の不本意な見方をしているんじゃないかと、ちょこちょこ気がついた。自分の感性を白紙にはできないんですけども、作り上げてきた感覚や知的な意識を、ちよつと戻さないため。子どものような目でね、初めてみる感覚で。この場所が初めてですからね、こういう作品を公開するのに、どうだろうか、ということ、作品を運んで展示したときに全く新しい見え方があって、それはやっぱり嬉しい発見ですよ。だから今まではエコヒイキをしていたというか、良い作品にはいいねと言ってわかった気になっているけど、そうじゃない作品はどうしてくれるんだと。答えようがない。それは世界中有名な絵、ピカソだろうが安田侃だろうがだめなものはだめとはつきり言えるような感覚じゃないと。うん、それは反省をしつつ。並んだときにね。

展覧会は明後日終わってしまうが、月曜日が淋しいですよ。必ず、お祭りだとかね、行事はそういうもんですけれども。

山口..

一点聞きたいのが、上木さんの「質」は、僕の言い方だと物差しがいくつもあって、美術館で恥ずかしくないっていうような物差しがなくなるとき、それってどの段階で何歳のとき、どういう状況のときに物差しがないって感覚が生まれてきたんでしょうか。

上木..

例えば字を書くときには読みやすい字を書く、誰でも読みやすい字。それから諸先輩がいるからこれは良い字だ、とか、これはお手本になるとか、字の場合はありますよね。だから絵の場合も昔は、臨画って言って、良い絵を真似して描いた。そういう誰が見ても。誰が見ても写真そっくりだと、写真そっくりだと昔も今も上手だねといわれるけども、写真そっくりに描かない絵が今また違う評価がある。アール・ブリュットですね、障がい者の絵とか、あと抽象画ですね、あとはわけのわからない物体、壊れたものを寄せ集めてジャンクアートとして作品にしてみよう。発想そのものが変わってきている。ルネッサンス以降の、近代までの絵に対する発想が。

だから、うまいというのはわかるんですけども、良いというのは個人の感覚であって、その感覚は強制してはダメなんです。教育というのは感覚すらも押さえつけて道筋を作ってしまったというの、日本の場合、教育のなかにはあると思っていて。そういう意味では山口さんの質問に対して、ずっと思っていましたよ、教育っていうものに対してね。例えば自分の好きな色があった場合、緑が好きは黄色も好き、コスモスだとか水仙だとか花を見ているとそういう色合いで生まれてきますから。花の色や草の色は心地よくできている。みんなそういうものを描いてきた。

だけど人間の場合はどうかっていうとね、美しい人、スタイルがいいっていう人、現代では非常に難しく、あの八頭身が良いといっても、違う国・風土にいと八頭身なんか良くないと。

頭が大きい方が良いとか、あの、手足が太い方がいとか様々。ヨーロッパ一辺倒の趣向が日本は余計強くてですね、美術に対してのヨーロッパ趣向の教育の弊害が絶対ある、と私は思う。そこはどういう風に変わってきたかという、そっくり上手に描けないの努力をしても、という人の方が多いです。そこで努力しても描けないっていうのは結果ではなく、それを認める、認識する、評価するという風にならないと、点数百点満点で百点に近い方が良いという発想でいくなら三十点以下だと無駄になっちゃうわけでしょ。でもテストが苦手な人もいる。テストで点数がとれないという人が沢山いますから。評価の判断をするときの、その認識度合い。LGBTとかいろんな問題でもね、差別区別の問題でもそうですけど。やっぱりありますよね。

だからオープンに風通し良く、自分の発想すらもなにか固まらないで、というね、年をとると固まっちゃうんだけどね、美術やってて良かったのは、「曖昧な人が良いな」というのが原点ですからね。あんまり評価にこだわらない。だからこれいいでしょって言ってもいいんですけど、私わかんないな、っていうのでもいいんですよ。わかんないのが、初めだから。強制的になんでわからないのかなこんな良い絵なのに、と言ってもわかんないものはわかんない。けど、どこかでわかったり、ある時ね、でもまた忘れちゃう。

山口.. 今回一点一点作品についてもありましたが、一二五点並んでいた感想というんですかね、今まで上木さんも少しずつ公開しようということで、役所の二階にあった市民ギャラリーあずましいでも少しずつ展示されてきたんですけど、そこから大きく規模をはずれて一二五点並んでみてどうですか。

上木..

普通ね、手慣れた人は風景なら風景で固めて、その風景も夕張らしいズリ山や炭住など分かりやすいんですよね。それに全然関連ない絵は離れたところに飾ろうとかいう感じだけど、今回山口さんのコンセプトは作家と時代だとか、絵そのものよりも描いた作家の生きた時代、それから描いた絵の中の題材っていうのかな、この写真の、特殊な病気のらい病院の、潜入してつちゅうか、その中に入り生活しながら撮ったという特殊な時代、稀有な作品ですね。これも二〇年位前に小泉政権の時にやっと、らい病の救済の法律もなった、その前の作品ですから、中々公開するにもはばかられた。どうやって見せたらいいか。結局共通認識が薄いですからね日本人は。こういう作品を初めて見せるということで、その隣に何を持つてくるのかということも苦労したと思う。だけど、隣り合って、仲良くするのかなんとか、隣り合うんですよね、どんな意識してもね、だから私だったらね、こうやって並べられないし、先程と重複するんですけど、やっぱり偏見に満ちた変な専門性があると、こういう風にはできないんであって。

▶展示会場の様子

初めて雨森さんの『らい園の詩』を展示しました。

(※作品では「らい」は漢字を使用されていますが、現代では差別的イメージがあるため使用していません。らい病は現在ではハンセン病として知られています。)



【一番重要なことは後から感じたりする】

山口：『氷上の椅子』という作品もあったんですけど、一つはゆうばりスポーツセンターのギャラリーで長く展示されていたので、どこかで見たことある、という風に思っていただけなんじゃないかなと思います。そこに展示したのと、椅子の上に誰も居ないという、不在だったり、でもだれかいるような、何かそういう、いてもいなくてもいいんだよ、っていうぐらいの気持ちで、展示に少し込めながら展示したところもありました。

上木： 帰りに本物をですね15cmぐらい近づいて観てください。椅子の上にほのかにふわっとしたピンクの形がなにかの形に見えるんですよ。あれは本物に近づかないと気づかない。それは私がですね、釧路市美術館の展覧会のための文章で書きました。フクロウがいるんですけど、木下勘二先生が描かないで消したのか、飛び立っていくからはつきり描かなかったのか、というような絵に見えるんですよ。それは本物を見たときに初めてわかった。

図録では微妙なところわからない。別の作品を観ると文字がかすんで、虫眼鏡で観ると、あれは墨継ぎして、新しい筆で書いたな、というようにわかるんですけども、木下勘二さんの『氷上の椅子』は、椅子の上には誰も座ってないけれど、フクロウが停まっていたのが飛び立って天に向って画面から消えているんだけど、ほわっとこう残像みたいなものがある、あるんですよ。というのを本物を初めて間近で見て気がついたっていうかね。何十年も収蔵品としてあつ

たのに、気がついたのが初めてだったというのが、やっぱりよく見るということ、目の前で。あの、好きな絵は特にね。そうすると何か向こうから訴えて来るというか、訴えていなくてもこちらからこう働きかけるというのと絵から働くものが丁度真ん中あたりでぶつかって、そこでも何かが生まれてくるんですね。それは光景であったり、感覚であったり、想いだったり、それは色々ですけども、そして一番重要なのは後から感じたりするんですよ、何日も経ってから。感動みたいなものはね。そこが展覧会だとか、ね、映画だとか今すぐに感動しない、あとからジャブジャブと何十年も経ってからとかね。だからこれはちょっと余計なことかもしれないけど、亡くなってから亡くなった人のことをしよっちゅう思っているというのがある。それに近いものがある。

山口..

僕も上木さんと仕事をさせてもらってから、それまで対話というのが目の前の人と、言葉の限りを尽くすことだと思っていたんですけども、改めて作品の前に立つて何も考えないでじつと見たときに、もつと心がいつも話さないことを話していたり、記憶の中の作品が自分に向けて語りかけてくれるような経験をすることが多くなって。今回の作品も撮影で一回目、出すときに二回目。三回目にあったときにまた違う語りかけをしてくれる。何かそういった喜びというか、自分に向って話してくれているということの嬉しさとか、そんなことを過剰にも思ったところもありました。



▶札幌アート・コミュニケータ
の案内で『氷上の椅子』を鑑賞
した様子

【今後の展示の方向性】

山口.. 最後の話題について移りたいと思うのですが、これからのコレクションの行方。夕張市美術館が無くなつてから、絵画のある街・夕張を目指して、少しずつ公開をしていこうといった作品達なんですけど、今後どのように扱ったり見せたりしていきたいなという想いつて何かありますか？

上木.. 常時展示する空間っていうかね、壁というか、建物に限られてしまったので、そして学校、中学校、小学校の学校に飾ろうと思ったけど、結構ないんですよ。飾る場所がない。子どもの展覧会の場合はテーブルの上に物、作品を置いたり、または小さいもんですからね、立てかけたりするんですけども、美術館のある程度額に入った大きなものを掛けるとなると、ホールにかけるか、あとは日差しが影響あつたら窓がない廊下など、ちよつと適さない環境があるんです。

こやつて並べてみると悪くないなと。毎度できないけれど年に数回はやつて、今回のように夏に夕張に一年に一度帰ってくる様なお墓参りの人が見れる、木下先生がある、畠山先生があるのと懐かしく絵と対面して、自分の生きてきた過ごし方を少しずつ振り返つて対面をしているというような時間の過ごし方を、こういう展覧会をやることによってできたのかなと思うんですよね。新しい作品はないけれど、狭くてもあるテーマを持たせつつ、常時七、八点だ

とか小さい写真であれば二〇点でとか、飾れる工夫をすれば飾れるので、それは年数回やっていけたらと思う。そして、あまり作品選定の質とかにこだわらず、初公開ですよと、これ以外に見ることできませんよ、といったPRで、どんな作品なんだろうと。

気になっているのがスケッチブックなんか結構ある。あれをどんな風に見せたらいいのかなど。映像をとって画面でパラパラと開いてるようなものを、画面でね。そういうのと、本物があつて、開いてもいいですよという部分だけを触って見せるのと。やっぱりスケッチブックは本物を見たいですね。本と同じですもんね。工夫を。

山口..

最後になりますが、夕張の文化、美術館の展示いろんな話ができて嬉しく思っています。これまで展覧会でできたのが、私もいろんなこと考えはしましたけど、やっぱり上木さんやその仲間たち、皆さんが残してくれたからこそできたことだと思うので、最後に上木さんに拍手をして終わりたいと思います。ありがとうございます。

上木..

恐縮です。三〇年ぐらい展示やってきたけど、何となく展示というのは楽しいし、面白いです。悪条件だからこそ、面白みが出てくるという。これが完璧で誰がやってもやりやすい場所だったら、面白くない。だから今作品はとっても嬉しいんじゃないかと。もう帰りたくないと言ってるかもしれない。

本冊子で言及された主な作家

小林 政雄 こばやし まさお

▶生年月日 1917 年（大正 6 年）9 月 9 日

▶経歴・作品歴

1917 年 東京に生まれ生後間もなく夕張高松 2 区に移住

1935 年 夕張工業学校卒業。北炭入社、鉱務係（測量）、以後
夕張鉱業所、新夕張砒、清水沢砒勤務

1939 年 第 15 回道展初出品入選

1948 年 第 23 回道展奨励賞受賞

1965 年 北炭退社し離夕

木下 勘二 きのした かんじ

▶生年月日 1917 年（大正 6 年）

▶出生地 夕張市沼ノ沢

▶経歴・作品歴

1934 年 札幌工業学校機械科卒業。三菱美唄砒業所入社

1938 年 第 14 回道展初入選

1945 年 三菱大夕張鉱業所退職。その後、夕張第二小学校助教諭、
夕張真谷地中学校教諭、夕張市立向陽中学校教諭、
夕張南高等学校教諭を歴任

1957 ～ '59 年 多摩美術大学夏期講習

1959 年 武蔵野美術学校西洋画科卒業

1986 年 「木下勘二作品集」発行。

夕張市美術館企画『木下勘二回顧展』開催（8 月 12 日～ 17 日）

畠山 哲雄 はたけやま てつお

▶生年月日 1926 年（大正 15 年）11 月 3 日

▶出生地 夕張市社光

▶経歴・作品歴

1941 年 北炭夕張鉱業所勤務

1947 年 第 22 回道展初出品入選

1950 年 道展会友

1951 年 道炭労・石炭鉱業連盟共催『炭鉱絵画展』炭労・連盟賞受賞

1952 年 第 27 回道展会員

1971 年 北炭夕張炭鉱退職

1978 年 画集「絵のある夕張」刊行

1981 年 夕張市美術館企画『畠山哲雄と夕張』

夕張市美術館の主な出来事・展覧会

- 1979 年 図書館の二階に開館
- 1986 年 『木下勘二回顧展』
- 1988 年 新装開館
- 1989 年 『小林 政雄の夕張展』
- 1990 年 『松原・比志ふたり展』
- 1991 年 『炭鉱を描いた 45 年 畠山 哲雄展』
- 1997 年 『江川 博』 展
- 1998 年 『憧れの時・佐藤忠良』 展
- 2000 年 『メタセコイヤの果実ー1 「炭鉱人の肖像」 展』
- 2001 年 『筑豊炭坑絵図 山本作兵衛展～ヤマの生活～』
『追悼・炭鉱を描いた画家 畠山 哲雄展』
- 2006 年 『ヤマのグラフィック 炭鉱画家の鉱脈展』 その他展覧会多数
- 2007 年 『Finish and Begin 夕張市美術館の軌跡、明日へ』
市が財政再建団体に移行したことに伴い
直営管理・運営終了
- 2012 年 積雪により倒壊 以降他館への作品貸し出しが増える。
- 2014 年 『夕張市美術館コレクション展
炭都・夕張の美術遺産』（有島記念館）
- 2017 年 『蘇る炭鉱の記憶』（小樽美術館）
- 2019 年 『木下勘二展』（釧路市美術館）

美術館だより



新装開館 20 周年記念展
木下勘二回顧展
2007 年 10 月 10 日（水）～ 11 月 10 日（土）
夕張市美術館



2022 年の収蔵作品展では、多くの来場者の方に「短冊」を手渡し、思い出などを記入してもらいました。

コレクションが来館者の想いと記憶を掘り起こしてくれました。私たちはどんな記録と記憶を、人から人へ、コレクションを介しながら継承していけるでしょうか。

これからも〈くりすた〉を拠点として、方法や在り方の探求は続きます。



Finish and Begin

